

2005年度第1回物学研究会レポート

「日本の社会とは ―日本の社会システムの深層を探る」

大宅映子氏

(ジャーナリスト、評論家)

2005年4月6日



BUTSUGAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

第1回 物学研究会レポート

2005年4月6日

2005年度の物学研究会は「深層からの出発 進化から深化へ」を年間テーマに、会を運営してまいります。

本年度第一回目はジャーナリスト、評論家として活躍されている大宅映子さんを講師にお招きしました。大宅さんといえば、構造改革の目玉であった「道路関係四公団民営化推進委員会」をはじめ、「税制調査会委員長代理」など、日本の政治、社会の構造改革に深く関わっていらっしゃいます。今回、「日本の社会とは 日本の社会システムの深層を探る」をテーマに、生活者の立場から、日本人と社会の在り様についてご講演いただきました。以下はそのサマリーです。

「日本の社会とは**—— 日本の社会システムの深層を探る」****大宅映子氏**

(ジャーナリスト、評論家)



; 大宅映子氏

今日は、お招きいただきましてありがとうございます。黒川さんと加藤タキさんとは、思えば本当に長い間お付き合いをさせていただいています。

さて、本日は「日本の社会とは 日本の社会システムの深層を探る」という難しいテーマをもらっていますが、先ほどご紹介いただきましたように、私の物事の考え方や行動は、常に生活者、個人という立場から出発しています。ですので、これからお話することも、1人の生活者として、日本人や日本の社会に対する私の考えを述べたいと思います。

「平等」の履き違えを問う

私には黒川さんやタキさんをはじめ、亡くなった安井かずみさんとか、個性的な友だちがたくさんいます。パーティや会食でお話ししていても、みんなが違った意見やアイデアを持っていてすごく楽

しいのですね。それぞれが違っているからお互いに刺激されるし、盛り上がるわけです。ところが日本では「みんな仲良しがいい、みんな一緒がいい」というのが一番のキーワードになっています。確かに仲が悪いよりはいいかもしれないけれど、仲がいいということは自分を殺して相手の言う通りにする、意見が対立することを避けるという意味ではありません。日本人には聖徳太子がおっしゃった「和をもって尊しとなす」の精神が刷り込まれているのかもしれませんが、私は戦後の教育の問題だと思います。「和」とか「仲良し」は、みんな同じ、みんな一緒ということではありません。相手を受け入れる。違いを受け入れて、その違いを認め合いながら共存するというのが、大人の当たり前の存在であろうと思います。ところが日本では、違いというとすぐに上下関係とか、男とか女とか、中央とか地方とかいう風に力関係に置き換わってしまい、単に「違う」という発想が浸透しない。特に、最近の若い人たちは他者と意見が違うことを極端に避ける傾向が強まっているようです。

よく日本人は農耕民族だから同質性が強いと言われますが、お隣の韓国では自己主張が強烈ですから、そういうことではないような気がする。島国というのはある程度関係しているにせよ、私は200年以上におよぶ鎖国の影響が強いのかなとも思います。つまり平等の履き違いです。平等というのは入口の権利やチャンスが平等であることが重要です。日本が資本主義を導入して自由や競争を認めているのであれば、結果に差が出るのは当たり前です。ところが戦後、結果に差が出るのが「差別だ」という意識がはびこってしまい、世の中がおかしくなったと私は思っています。

例えば、20年以上前から、多くの小学校で運動会の駆けっこで1等賞、2等賞をつけないことになりました。なぜ1等賞、2等賞をつけてはいけないかという、たかが親からもらった走る能力に1等だ2等だと格付けするのは差別だ、遅い子はかわいそうじゃないか、というのが心根です。けれども長い人生の中では負けることはあるわけです。人生のあらゆるシーンで勝ち続けるなんてことはあり得ない。駆けっこは速いけど算数はだめとか、算数はできるけど絵が下手とか、いろんなシーンでほめてあげればいい話です。駆けっこで負けるのは悔しいだろうけれど、だからこそその悔しさをバネにして人間は努力するわけです。勝ったからといって奢ってはいけないし、負けたからといってそこで凹んではいけない。「人は勝ったり負けたりするものだよ」と教えるのが教育の場なのだろうけれど、日本ではそれをずっとやってこなかったんですね。その成れの果てで、今、世の中がおかしくなっているのだろうと私は思います。

私がこう発言したときには、「それは強者の論理である」と、かなり矢が飛んで来ました。けれども私は、人生の中で役のない人はいない、それぞれの役割に上下関係をつけたり序列化するから、おかしなことになってしまうと考えているのです。違い、単なるディファレンスという話が、今の日本にはあまりにも欠如しているのだと思います。

頑張った人がほめられない社会

日本がずっと元気になれなかったのは、「頑張った人がほめられない社会である」ということも言えそうです。たくさん税金を払った高額納税者が新聞に発表されると、ほとんどの人は「なんかうまくことやがって」と思うことはあっても、「あの人は頑張ったのだな。先見性があったんだな」という発想はなかなかしない。これはもう平等という名を借りた妬み以外の何ものでもありません。

確かに、人が妬むというのは当然の心理だし、日本がここまでできたのは、「欧米に追いつけ追い越せ」というある意味で妬みの心理を原動力にしてきたとも言えるかもしれません。しかし、世界に冠

たる国になってまで、未だに「・・・ようなもの」ねだりはどうしたものでしょうか。状況はすっかり変わったのです。「欧米のようにになりたい」「アメリカのように豊かになりたい」という目的を達成した今、日本人に突きつけられているのは、あなたは何がしたいの？ どんな人生を生きたいの？ 日本をどんな国にしたいの？という根本的な問いかけです。ところが、その回答が未だに見つけれず、右往左往している状態なのだろうと思います。

悪いことはなかったことにしたい

さらに、日本を悪くしているのは、「悪いことはなかったことにしたい」という心理です。これは日本人独特の不思議なメンタリティーだと思います。日本人の中には「水に流す」という話はあるんですけども、お隣の中国も韓国も悪いことはなかったことにしないし、水にも流さないわけです。子どもたちに歴史を教えていないということは、明らかに「なかったことにしたい」と意図しているとした、私には思えない。確かに、中国も韓国も少し感情的にすぎるかなあとは思いますが、やはり「悪いところはあった」というところから話を始めないとまずいと思うわけです。

もう一つは、「悪いことは、だれかが先に手を下していれば防げたはずだ」とみんなが思っていることです。そして何か悪いことが起こると、必ず管理者責任はだれだという犯人探しが始まります。でも悪いことというのは、自分が悪いか、だれか他人が悪いか、運が悪いかの3つです。実際のところ運が悪いことまで予防はできません。現代社会を生きる以上、人は危険と利便性を天秤にかけながら行動します。飛行機が1機落ちたら500人死ぬし、自動車事故で年間8000人ほどの人が死んでいます。でも人間は利便性を評価するからこそ、飛行機にも乗るし、自動車も運転するわけです。私たちが生きていくなかで、完全なる安全とか、完全なる善はまずあり得ない。何かが起きたら、だれかが手を差し伸べてくれるといった甘えは許されないのです。

ところが今、学校で子どもが鉄棒から落ちて先生責任、遠足で雷が落ちて引率の先生責任になる。雷をどうやって防ぐわけですか。あるいは、子どもが海でおぼれてしまったとき、よく遊泳禁止の札がなったからだと言われたりしますが、札があれば事故は一切起きないのでしょうか？ そうではなくて、溺れてしまったのは不注意だってあるだろうし、雷が落ちたのは不幸としか言いようのない出来事なのです。けれど、責任を問われるからという理由で、遠足も行かない、海でも泳がせない、危険が伴うことは何もさせないということをやっていると、人間としてやわになってしまいます。今、本当に変な子どもたち、変な若者が大量生産されています。その根っこは、こういうところにあると思います。

規制だらけの日本の自己責任

そもそも危険回避能力は自分で育てるべきものです。だれかが事前に手を下してくれれば防げるということではありません。日本はずっとお役人が牛耳って来たわけですが、何かミスが出ると厚生省は何をしていたのか、警察の責任だとか言われてしまうので、何事に対してもどんどん規制を加えるわけです。そして日本は規制だらけのがんじがらめの不自由な硬直した国になってしまった。原因は全部過保護、過干渉です。

過保護、過干渉で困ることはコストが高くなること。もっと重要なのは人間がやわになってしまう

ということです。イラクの日本人人質事件が起きたとき、私はあの事件は自己責任の問題だと思いました。ところが一方で「自己責任なんて言いつのるそんな冷たい国に、日本はいつからなったんだ！」みたいな意見も沸きあがりました。加えて、ある人たちは「お前は、川で溺れている人に対して自己責任だと言って手を差し伸べないのか」と主張していましたが、イラクの人質事件は、そうではないです。

私はこう考えます。例えば、危険に対する情報が何もなく、たまたま泳いでいたら波に巻き込まれてしまったというのなら、それは自己責任でも何でもなくてとにかく必死に助けなければならないでしょう。しかしイラクの人質事件は「高波で遊泳禁止です。台風も近づいています。だから決して泳いではいけませんよ」というような危険な場所へ、「私はイラクの子どもが好きなのよ」という理由で出かけていったわけです。これはどう考えたって自己責任です。私が言っているのは、帰りの飛行機賃や身代金の話ではありません。彼らは行かなければ絶対捕まらなかった。危険という情報を知っていたのに敢えて出かけて行って捕まったのは自分のせいですよ、というだけの話です。彼らが大きな危険を犯してまで、崇高な理想とかボランティア精神で出かけたのならそれもいいでしょう。しかし結局、人質に取られてしまったわけで、日本や人々にあれだけ迷惑をかけたなら、理想も目的も吹っ飛んでしまうと私は思うわけです。

無責任体質とコスト高の関係

コスト高の話に移りましょう。私は車を運転してもう46年になりますが、日本ほどガードレールや信号機、中央分離帯、変な看板やお巡りさんの人形が立っているバカな国はありません。事故が起きると必ず信号がつかます。最近、我が家の近くに新しい中央分離帯ができました。理由は、1人の老人が分離帯を跨いで道を渡って轢かれたので、絶対跨げないような堅牢なものを作ったというわけです。しかし、黒い洋服を着て真っ暗闇の中を横断歩道でないところを渡って車にぶつかったら、それは本人の責任だとは思いませんか？ 私はそう考えるのですが、今の日本国は絶対に本人の責任とは言わない。あくまで車のほうが悪いということになって、人が絶対に渡れない必要以上に立派な中央分離帯を作る。そしてどんどんコスト高になる。

私は行政改革委員会の委員をやり、誰も責任をとりたがらないという日本人の習性、そしてその賜物のような矛盾が山ほどあることを知っています。そもそも構造改革というのは、官が持っている決定権を個人に取り戻すことだと私は理解しています。規制緩和も同じです。ところが日本人は自分で責任を取りたくない。だれかが先にちゃんと手を下していればこんなことは起きなかったと信じて疑わない国民、そして先へ先へと大きなお世話をする行政の利害関係のバランスが微妙にうまくとれていて、その結果がんじがらめの国が成立しているのです。

今こそ、「個」が強くならなければいけないし、自分で責任取るからそんなものはいらぬとはっきり主張しなくてはならないのです。行政がすべきことは環境整備だけでよいはず。先ほど、物学研究会のサイトを見たら、「自らの立場を客観的にとらえて、明確なビジョンを持ち、多様な考えを聞き、変革の道を構築するしかない」と書いてありました。全くそのとおりです。国民1人ひとりが声を上げない限り、行政が決定権を握り続け、それにぶら下がって既得権を持って甘い汁を吸っている人たちは居なくならない。

道路関係公団民営化推進委員会の戦い

一番わかりやすい例は、道路関係公団民営化推進委員会でしょう。私も委員の1人として参加しています。この構造改革プロジェクトの中で一番重要なことは、お金の入口と出口をどうするかということなのです。日本人は国が保証してくれるからと思って郵便貯金でせっせと貯金し、簡易保険にも加入して保険料を支払っています。この莫大なお金は（現在は少し変わりましたが）、一度大蔵省に入ってから財政投融資として道路公団のような特殊法人に利子をつけて貸し出されていたわけです。これは貧しい時代に社会資本を造るためには有効なシステムでしたが、高度成長期にはお金がだぶつく中で、道路公団はいくらでもお金を使ってくれる特殊法人の優等生でしたから、お金がどんどん流れていったのです。ところがしばらくして、社会の状況は大きく変わりました。ムダを承知で本州と四国を結ぶ橋を3つも建設したり、狐しか通らない道を建設し続けています。これは道路がほしいのではなく、道路工事をほしい人が沢山いるということなのです。

今、小泉首相が郵政民営化に取り組んでいますが、本当の構造改革を達成するためには、郵政改革はお金の入口で、道路公団をはじめとした特殊法人改革はお金の出口であると思っていただければいいわけです。現在、メディアの多くは郵政改革を郵便の問題として取り上げていますが、郵貯350兆円という資金が有効に使われれば日本はもっと元気になるということの方が大切なのです。このお金の入口と出口の関係をちゃんと切らないと、いつまでたってもお金の垂れ流し状態が続きます。さらにこの構造を破壊しない限り、私たちの孫たちの時代には、日本の借金はさらに膨れ上がるという恐ろしい事態に確実になります。それにも関わらず、実情をだれも言わなかったし、手をつけなかったんですね。

この「パンドラの箱」を開こうというのが道路関係公団民営化推進委員会だったわけですが、皆さんもご存知のように、現在は猪瀬直樹さんと私だけが委員を継続し、他の方はお辞めになってしまいました。辞めた人たちは、民営化後は道路を一切作らないと考えていらしたようです。しかし、今まで甘い汁を吸っていた人たちが、道を1本も造らないことを認めるはずもありません。猪瀬さんと私は現実主義だから、相手側とは意見をすり合せながら合意点を探るべきだと思っていました。そして最終的には、道路公団の分割・民営化、コスト削減は決まったし、道路料金を下げますという確約を取り付け、今後45年をかけて40兆円の借金を返済することも法律で決まった。これだけクリアできていれば、60点は取れていると私たちは判断しています。

それで、まだやっているのですかと質問されるのですが、まだやっています。定足数に足りないのが委員会ではなく懇談会という名前になっていますが、委員会と同じように機能しており、国土交通省も公団の総裁もみんな出て来ます。先ほど、60点の出来栄えといいましたが、確かに後の40点分の問題が山積しています。2005年10月に道路公団が民営化されれば情報公開も取れなくなりますし、今のうちに膿を出し切っておかねばという気持ちでやっています。一時期、猪瀬さんが道路公団側に寝返ったかのような報道もなされましたが、少しずつでもいい方向に動いていることは確かなので、ご安心いただきたいと思います。

メディアの責任

今までお話ししてきたように、構造改革、日本を元気な国にするか否かというのは、結局日本人の意識にかかってきています。国民みんなが声をあげない限り、既得権を持って甘い汁を吸っている人たちの大声に引きずられて世の中が動いてしまう。その一步として、欧米のようになりたいという貧者の哲学から富者の哲学に変えなければいけない。そのためには、日本人1人ひとりが自分はどんな人生を送りたいのかを見極めることです。今ようやく人とは違う生き方を選べる時代になったのに、行政のお仕着せを受け入れるだけの民主主義をやっていたら、日本の未来は多分ないだろうと思います。しかし、昨今の金で買えないものはないとか、勝者の理論を押し付けるような風潮はちょっと考えものだと思います。発言の方法、喧嘩のやり方にも流儀はあるのではないのでしょうか。私はさっき日本人の仲良しごっこはいやだと言いましたが、日本人のやさしさは日本の良さであるわけで、なくしてはいけないと思います。

言いたい放題のレクチャーになってしまいましたが、最後に、今の日本で一番問題なのはメディアだと思っています。日本の報道は物事を対立図式にするのが好きです。今は小泉さんをワンフレーズ首相だなんて言って叩いていますが、メディア自身がワンフレーズでわかりやすく表現をして叩いているだけなんです。でも時代は男対女、中央対地方、企業対消費者といった対立図式や叩くだけではだめなんです。だって、環境問題なんて、対立構図でみたら人間の存在が悪だみたいな話になってしまうのですから。生き延びるためにはどうやって歩み寄るかを考えるべき時代、メディアも単に権力側を叩けばよいという姿勢は見直す時期なのかもしれません。

と言う私はメディアで禄を食っておりますけれども、テレビが出始めてほんの2年くらいで、わが父大宅壮一は「テレビは1億白痴化を促す装置である」と言いました。つまり、テレビに対して人はいつも受け身である。残念ながら、人間は浅はかな覗き見趣味とか他人の不幸は蜜の味とかに惹かれるもので、それを視聴率競争という名の下に刺激をどんどん強くする。すると、受け手はほとんど考えることなしに受け入れて行って、だんだんアホになる、と。1億総白痴化というのはテンデンスーを表した言葉ですので、現在では「化」というのは取れて「一億白痴」と言ってもいいかもしれません。

「言うだけじゃ何も変わらない」とよく言われますが、それにしても今の日本には「あなたたちがしっかりしなければだめじゃないの」と言う人すら居ないわけで、私はそれを言う役だと思ってやっています。どうも聞いていただいてありがとうございました。 以上

講師プロフィール

大宅映子氏（おおや えいこ）評論家

1941年、大宅壮一の三女として東京に生まれる。1963年国際基督教大学卒業後、PR会社を経て、1969年（株）日本インフォメーション・システムズ（NIS）を設立、代表取締役社長。企業や団体の文化イベントの企画プロデュースを手掛ける。1987年～からは、国際問題・国内政治経済から食文化・子育てまで、マスコミの世界でも活躍中。

同時に、「税制調査会」「雇用審議会」「地球的規模の環境問題に関する懇親会」

「道路関係四公団民営化推進委員会」などの審議会の委員を多くつとめ、日本の構造改革に関わってきている。

主な著書：『いい親にならなくていい!』（廣済堂出版、1995年 共著）他

現在のレギュラーはTBS系「ニュースプラザ」、同じく「サンデーモーニング」など。

2005年度第1回物学研究会レポート
「日本の社会とは ―日本の社会システムの深層を探る―
大宅映子氏
(ジャーナリスト、評論家)

写真・図版提供

; 株式会社大宅映子事務所

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

[物学研究会レポート]に記載の全てのブランド名および
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
[物学研究会レポート]に収録されている全てのコンテンツの
無断転載を禁じます。